MYU Design Study Center
宮城大学デザインスタディセンター

DESIGN STUDY CENTER

STUDIO REPORT

2022

総合的に考え，つくる力の醸成

デザインを通して，新しい価値をどう生み出していくことができるか。流動的で不確実な時代において，あるべき社会の未来を構想し，そこに生じる課題を創造的に解決することができる高度なデザイン人材が今求められています。

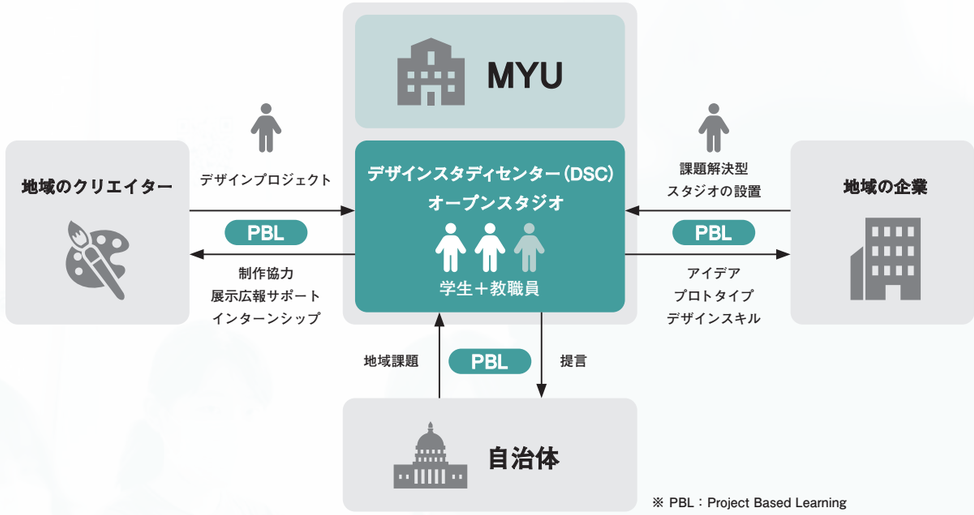
宮城大学デザインスタディセンター（以下 DSC）は，宮城大学を中心として学生や大学関係者・地域の事業者・自治体が集い，共に学び，プロジェクトを展開する共創的な教育研究プラットフォームです。様々な専門性を持つ参加者が交流し，地域資源をデザインの視点から探索することを通して，その価値を自ら考え再評価したり創造したりするための活動を行なっています。

DSCは2020年度から活動を開始し，2022年度はオープンスタジオの開講，公開イベントの開催，オウンドメディアの開設などを通して活動の幅を広げ，東北の新たなデザインの拠点となることを目指して活動を続けています。

DSC Webサイト
https://www.myu.ac.jp/dsc/

地域に開かれた共創の場を目指して

大学・地域のクリエイター・地域の企業・自治体が集い，議論できる枠組みを2021年度から模索しています。これまでの2年間で5つの試験的なスタジオを開講。様々な分野の社会変革に携わる事業者やデザイナーをゲストとして招き，その考え方や実践方法を学んでいます。



※ PBL：Project Based Learning

幅広い層へ学びを提供

デザインや価値創造に関心がある学生・教職員・社会人・自治体職員にむけてプログラムを開放。参加者の多様なニーズを満たし，オープンな議論を行うことで，コラボレーションを加速することができる機会を提供しています。

	学生	教職員	社会人	自治体職員
対象				
メリット	学群・学年を超えた交流 ポートフォリオの充実	最新トピックの吸収 学内連携	コラボレーションの促進 リカレント教育	地域課題の理解 地域課題の議論

2022年度のDSCスタジオ

2022年度は，宮城大学全体の教育方針に含まれる「デザイン思考」，大学のもつ3学群の「知の接続」，開かれた共創の場を目指した「地域社会との連携」をテーマに計画された3つのスタジオを開講しました。

STUDIO 1『（ロゴ）デザインのプロセス』では，スタイリングと誤解されがちなグラフィックデザインの役割をとらえ直し，コミュニケーションツールとして用いるためのデザインプロセスを体験。
STUDIO 2『肉の未来』では，肉という生活に密着したテーマがもつ現代的な問題の広がりに触れ，デザインの視点から私たちがとるべきアクションを模索しました。
STUDIO 3『地域文化の再構築と発信』では，近年注目が高まる一方で多様な課題を抱える地域文化の情報発信を，編集の視点から考えました。

いずれのスタジオでも社会の第一線で活躍する実務家をゲストに招き，レクチャーとフィールドリサーチを含む実践的なプログラムを体験することで，発展的な学びを学内外の参加者で共有することができました。

2022年度は「デザイン思考」「知の接続」「地域社会との連携」に主眼を置いた3つのスタジオを開講

STUDIO 1
（ロゴ）デザインのプロセス

STUDIO 2
肉の未来

STUDIO 3
地域文化の再構築と発信

［ゲスト］
丸山 新 氏（&Form LLC）
髙橋 恵佑 氏（DESIGNER）

［ゲスト］
田村 大 氏（株式会社RE:PUBLIC）
石川 伸一 氏（食産業学群 教授）
大山 貴子 氏（株式会社fog）

［ゲスト］
山田 雅也 氏（縦糸横糸合同会社）

［DSCデザインスタジオ担当教員］
土岐 謙次（事業構想学群 教授），本江 正茂（事業構想学群 教授），佐藤 宏樹（事業構想学群 准教授），
貝沼 泉実（事業構想学群 特任助教），小松 大知（事業構想学群 特任助教）

SCHEDULE

3つのスタジオでは，いずれも“デザインとは何か”という大きな問いがはじめに投げかけられ，設定されたテーマに対して深く考察し，見出された本質的な課題に取り組むプロセスを通して，参加者全員が“デザイン”そのもののあり方を考えました。時には現場へ足を運び，自らの目で見て体感しながら，多角的に課題と向き合いました。

※会場名の記載の無いものは，宮城大学大和キャンパスデザイン研究棟 1F オープンスタディにて実施しました。

2022 6月　STUDIO 1 参加者募集開始

7月　**STUDIO 1**　（ロゴ）デザインのプロセス
- 7月 9日　第1回　DSCオープンレクチャ
- 7月15日　第2回　ワークショップ「（ロゴ）デザイン」①
- 7月22日　第3回　ワークショップ「（ロゴ）デザイン」②
- 7月29日　第4回　ワークショップ「（ロゴ）デザイン」③
- 8月 4日　第5回　講評会

8月

9月　STUDIO 2 参加者募集開始

STUDIO 2　肉の未来
- 9月24日　第1回　DSCオープンレクチャ
- 10月 1日　第2回　フィールドリサーチ@大崎市まきばフリースクール，太白キャンパス坪沼農場
- 10月 7日　第3回　フィールドリサーチまとめ
- 10月14日　第4回　仮説の組み立て・発表
- 10月22日　第5回　全体ワークショップ「肉の未来祭」
  @太白キャンパスディスカバリーコモンズ，研究棟5F ラウンジ

10月

11月　STUDIO 3 参加者募集開始

12月

STUDIO 3　地域文化の再構築と発信

2023 1月
- 12月26日　第1回　DSCオープンレクチャ
- 1月15日　第2回　フィールドリサーチ@南三陸町各所
- 1月17日　第3回　フィールドリサーチまとめと構想
- 1月26日　第4回　講評会

STUDIO 1 （ロゴ）デザインのプロセス

ロゴデザインを構築するためには，デザインが社会的に果たすべき役割を示すコミュニケーションツールであることを作り手が理解し，最適な表現方法を選択する必要があります。本スタジオでは，社会の第一線で活躍する実務家による講義や，アドバイスを受けながら課題解決を模索するワークショップ，またその成果物への講評を通し，デザインプロセスの理解を目指しました。

PROCESS

2022年7月 9日(土) 第1回 DSCオープンレクチャ
2022年7月15日(金) 第2回 ワークショップ「(ロゴ) デザイン」①
2022年7月22日(金) 第3回 ワークショップ「(ロゴ) デザイン」②
2022年7月29日(金) 第4回 ワークショップ「(ロゴ) デザイン」③
2022年8月 4日(木) 第5回 講評会

会場：大和キャンパスデザイン研究棟 1F オープンスタディ
参加者数：合計47名
（事業構想学群 43名，看護学群 2名，食産業学群 2名）

GUEST

丸山 新 氏

第1回レクチャ, 第5回講評

1978年宮城県生まれ。2001年，イタリアBenetton社主催によるFabrica研究生を経て，2002年渡英。Central Saint Martins美術大学グラフィックコミュニケーションデザイン学科にてタイポグラファーPhil Bainesの元で学び，文学士号を取得。2006年，スイス，キアッソ市立m.a.x.美術館のアートディレクターに就任，5年間の在籍中にスイス国内外にて数々のキュレーション，展示デザイン，告知物等を手掛ける。南スイス州立大学SUPSIのデザイン・コラボレーターを経て2012年に帰国し，&Form LLCを設立。NYタイポディレクターズクラブ「タイポグラフィック優秀賞」（アメリカ），Premio Mobius「第一等」（スイス），ラハティポスタービエンナーレ「ファイナリスト」（フィンランド）等をはじめ国内外のデザイン賞を多数受賞。

髙橋 恵佑 氏

第1回レクチャ, 第2〜4回アドバイザー, 第5回講評

DESIGNER, DIRECTOR，1991年 仙台市生まれ，2014年 宮城大学デザイン情報学科 卒業，印刷会社を経て広告代理店勤務，GRAPHIC DESIGN / advertising / poster / logo / art work of music

ACTIVITIES

#01 DSCオープンレクチャ

初回は，丸山氏，髙橋氏によるレクチャを実施。丸山氏からは，クライアントのアイデンティティの本質を捉えて最適な表現を選択するプロセスが美しく効果的なデザインに繋がることを，髙橋氏からは，コンセプトを多角的にグラフィックに落とし込む手法に加え，本学での学生時代の自己研鑽をご紹介いただきました。

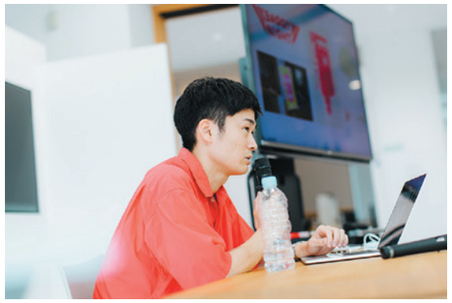
実施日
2022年7月9日(土)

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

レクチャ／ロゴデザインの本質とは？ ーアイデンティティをデザインする

講師：丸山 新 氏（&Form LLC）

丸山氏からは，ロゴをはじめとした様々なデザインの事例をご紹介いただきました。どの事例にも共通するのが，クライアントへ問いを投げかけ，共にアイデンティティを考え直すというプロセスを経ていること。対象がはじめから持っているアイデンティティを見定め，問いからデザインを導くことが重要であるとの助言がなされました。



ワークショップキックオフ

講師：髙橋 恵佑 氏（DESIGNER, DIRECTOR）

本スタジオのテーマは「DSC」のロゴを作成すること。髙橋氏からは，ロゴを作成する際の心がけや検討の手法をご紹介いただき，まずは参加者各自が「DSCらしさ」をテーマとしたマインドマップを描くことに。デザインの対象を分解し言語化しながら，着眼点やオリジナリティを明確にしていきました。

活動フロー 「DSCらしさ」のリサーチ ▸ マインドマップ作成 ▸ 着眼点等発表

ACTIVITIES

#02 … #04

ワークショップ「（ロゴ）デザイン」①②③

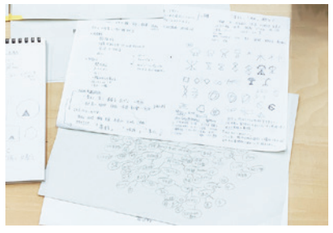
参加者は，4つのグループに分かれてデザインスタディセンターのロゴデザインを進めていきました。毎回高橋氏のデザインプロセスに関するレクチャーを受け，関係者へのヒアリングを通したアイデンティティの発見や，要件からモチーフを発展させる方法など，グラフィックデザインの背後にある様々なプロセスを学びながら制作を進行。各グループが考える「DSCらしさ」を念頭に置き，オリジナリティのあるロゴデザインの創造に取り組みました。

実施日
①2022年7月15日（金）
②2022年7月22日（金）
③2022年7月29日（金）

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

「DSCらしさ」を伝える ロゴデザインとは？

ワークショップ①は「ことばを形に起こしていく」をテーマに，各自が作成したDSCのスローガンと，特技や興味を紹介するパーソナルシートの発表からスタート。互いの発表から，思考が近い人や自分の求める技術を持つ人を見つけ，グループを組んで課題に取り組むことに。まずは「デザインクライテリア」（ロゴマークに仕上げる手前のキーワード）の掘り起こしを行い，ロゴのベースとなる形の書き出しを行いました。
ワークショップ②のテーマは「ブラッシュアップポイントを探ろう」。グループごとに作成したロゴマークと，デザインの意図の発表を通じて，自分たちのデザインポリシーを明らかにしつつ，改善が必要なポイントを深掘り。また，オリジナリティを高めるために，類似する既存ロゴマークの調査も実施しました。
ワークショップ③では「展開案を考えよう」というテーマのもと，ロゴマークが実際に使用されることを想定したマニュアルと，看板や広告，各種ツールなどでの展開イメージを作成。形だけでなく，その後の使われ方まで想像することで，ロゴマークの精度を高めていきました。



#05

講評会

最終回には丸山氏，髙橋氏を迎え，各チームが提案するロゴの発表と講評を実施。プレゼンテーションでは，各チームの作成したグラフィックとそのコンセプトに加え，名刺やレターセットへの応用など実際のコンペティションと同様に様々な利用シーンが合わせて提案され，講評を受けました。

実施日
2022年8月4日（木）

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

チーム①作品コンセプト

DSCを拠点に，生まれていく文化

DSCは学内外問わず人々が訪れ，それをきっかけに多様な活動やアイデアが生まれる場。様々な方向から集まり，飛び出していく上昇気流にヒントを得て，動きのある形を表現しました。

チーム②作品コンセプト

DSC = デザインの意志を映し出す場

DSCのガラス張りの建物から光の反射やプリズムを連想。デザインという領域に様々な分野から解決を試みるDSCの理念や，ここから羽ばたくデザイン思考を持った人々を自然光と分光に重ね，モチーフに使用しました。

チーム③作品コンセプト

伝統を重んじ，常識を覆す

木を抽象化したマークは，知識や技術の集約や，DSCが創り出すまだ見ぬ未来への波及を表しており，枝葉を明確に表現しないことで，形が一つに定まらない多様な未来への期待が込められています。

チーム④作品コンセプト

集まる・つながる・発信

集まる，つながる，発信というワードからメタボールを連想し，これをベースにしてコンセプトを表現。一番大きなボールはDSCを，小さな3つのボールは宮城大学の３つの学群を表しています。

STUDIO 2 肉の未来

「肉」と一口に言っても，その周りにはブランディングや培養肉など数多くのトピックが存在します。本スタジオでは「肉」という身近なテーマを通して社会的な課題を見通す力や，そこから得た知見をもとに「デザイン」の視点からアクションを起こす姿勢を全5回のワークショップを通じて学びました。

PROCESS

2022年 9月24日(土) 第1回 DSCオープンレクチャ
2022年10月 1日(土) 第2回 フィールドリサーチ
2022年10月 7日(金) 第3回 フィールドリサーチまとめ
2022年10月14日(金) 第4回 仮説の組み立て・発表
2022年10月22日(土) 第5回 全体ワークショップ「肉の未来祭」

会場：第1, 3, 4回 大和キャンパス デザイン研究棟 1F オープンスタディ
第2回 大崎市まきばフリースクール，太白キャンパス坪沼農場
第5回 太白キャンパスディスカバリーコモンズ，研究棟5F ラウンジ
参加人数：合計16名（事業構想学群 8名，食産業学群 1名，学外者 7名）
特別講師：武田 和浩 氏（特定非営利活動法人 まきばフリースクール）
中村 聡 氏（食産業学群教授）

GUEST

田村 大 氏

第1回レクチャ，第5回講評

神奈川県生まれ。幼少期を福岡県・小倉で過ごす。東京大学大学院学際情報学府博士課程単位取得退学。新卒で博報堂に入社後，デジタル社会の研究・事業開発等を経て，株式会社リ・パブリックを設立。国内外で産官学民を横断した社会変革・市場創造のプロジェクトを推進している。

石川 伸一 氏

第1回レクチャ，第5回講評

宮城大学食産業学群教授。東北大学大学院農学研究科修了。北里大学助手・講師，カナダ・ゲルフ大学客員研究員などを経て，現職。専門は，分子調理学。関心は食の「アート×サイエンス×デザイン×テクノロジー」。

大山 貴子 氏

ファシリテーター

ニューヨークにて新聞社，EdTechでの海外戦略，編集＆ライティング業を経て，2015年に帰国。サーキュラーエコノミーの実現を目的としたデザインコンサルティング会社，株式会社fogを創業。直近では，キッチンやリビングラボを兼ね備えた施設「循環する日常をえらぶラボ "élab"（えらぼ）」をオープン。

ACTIVITIES

#01 DSCオープンレクチャ

国内外で産官学民を横断した社会変革・市場創造のプロジェクトを推進する田村氏，分子調理学の第一人者であり食産業学群教授の石川氏によるレクチャを実施。後半には大山氏より，食を中心とした持続可能な社会への取り組みの紹介と，ワークショップのオリエンテーションが行われました。

実施日
2022年9月24日(土)

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

レクチャ① 何をデザインするのか？ ー持続可能な社会におけるデザイナーの役割

講師：田村 大 氏（株式会社リ・パブリック）

田村氏からは「プロジェクトをデザインする」「対象を決めずにデザインする，ないものをデザインする」をテーマに，自身の取り組みの紹介を交えながら，本スタジオにおけるアイデア創出の足掛かりを提示。様々な事象の観察を通じて，自らの常識を疑いながら，違和感を見逃さずに取り組んでほしいとの助言がなされました。

レクチャ② フードテックは肉の未来をどうデザインするのか？

講師：石川 伸一 氏（宮城大学食産業学群教授）

石川氏は「フードテックの現状」を始め，SF Prototyping* を用いた食及び食の価値観の未来を想像するという手法を紹介。その上で，食は個人によって価値観が大きく異なるという前提を念頭に置き，テックだけに解決を求めるのではなく，広い視点でアイデアを探ってほしいとの期待を述べられました。

*SF Prototyping：SF的な手法でプロトタイピングを行うこと

ワークショップオリエンテーション

講師：大山 貴子 氏（株式会社fog）

大山氏より，自身の活動紹介と本スタジオの流れが説明され，対象の分解や気になるポイントの抽出，外的要因の探索，行動変容を通して，新たな視点を獲得するという目標を共有。その後，個人ワークとディスカッションを通じて設定された初期視点を元に，全体ワークショップまで共に活動するチームが構成されました。

活動フロー 気づきと初期視点の整理 ▸ ディスカッション ▸ 初期視点発表 ▸ チーム分け

ACTIVITIES

#02 フィールドリサーチ

大崎市まきばフリースクールと太白キャンパス坪沼農場で実施した学外フィールドリサーチでは，フィールドに隠れた「機会」や「可能性」を発見するためのリサーチ方法を実践。参加者は実際の動物と畜産の現状に触れることで，デスクワークでは得ることのできない肉にまつわる現状と課題を実感を持って知ることができました。

実施日
2022年10月1日（土）

会場
大崎市まきばフリースクール，
太白キャンパス坪沼農場

大崎市まきばフリースクール
989-6241 宮城県大崎市古川清水沢畑谷

1999年に創設された，寄宿型フリースクール。現在は同敷地内に，介護，児童福祉，障害福祉に関わる7つの事業も運営。持続可能な循環型のコミュニティの構築に取り組んでいます。

宮城大学太白キャンパス 坪沼農場
982-0231 宮城県仙台市太白区坪沼沼山35-3

太白キャンパスから8kmほど離れた場所に位置する附属牧場。約31.4haの自然豊かな敷地に，水田や畑地，牛舎などが備えられており，実習に最適な農場となっています。

フィールド①
大崎市まきばフリースクール

特別講師：武田 和浩 氏（特定非営利活動法人 まきばフリースクール）

はじめに，武田氏にご案内いただきながら，まきばフリースクールのある敷地内の牧場や設備，飼育されている動物を視察。各動物の役割や牧場の使われ方など，日常のあり方を丁寧にご説明いただきました。
つづいて施設内に移動し，まきばフリースクールを始めとする自身の活動について武田氏よりご紹介。自身が若い頃に生きづらさを感じていた経験から，自分のように悩む人へ親身になることを目指し，1999年に「まきばフリースクール」を開所。「まきばフリースクール」は不登校や引きこもりなど，様々な生きづらさを抱える人々のための場で，学校などの社会に戻る手助けをするのではなく，彼らの新しい価値を生み出していくことを目的としています。更に，スクールの開所を皮切りに，老人介護施設など多数の場を創設。自身も高校時代に牛を飼育していたことから，農福連携という考え方を念頭置き，利用者と動物，農業が関わり合いながら過ごせる場所づくりを行っているとの説明がなされました。
具体的な事業活動内容に加えて“人を選ばず排除せず”など，武田氏の活動における信条もご紹介いただき，参加者からは「動物や作物を育てる過程において，当事者の課題を解決したりそのきっかけを見つけるというプロセスがとても興味深く感じた。」との声が聞かれました。

はじめに，武田氏に農耕，畜産，支援施設が共存する自然豊かな敷地内を案内していただきました。

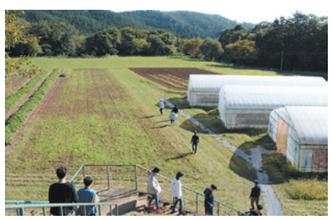
実際に牧場で飼育されている牛やポニーとの触れ合いを通じて，生き物や彼らとの関わりから受けている様々なめぐみを見直しました。

活動に賛同した多くのボランティアだけでなく，利用者自身もスタッフとして活動し，生活を支え合っています。

フィールド②
宮城大学太白キャンパス 坪沼農場

特別講師：中村 聡 氏（食産業学群教授）

太白キャンパス坪沼農場では，まず坪沼農場の概要を中村氏よりご紹介いただきました。坪沼農場はおよそ1.7haの畑地があり，様々な作物や家畜の生産も行っています。特に，農場で栽培されているネギ，なす，トマト，ピーマン，パプリカは，安全で持続可能な農業を行っている証であるグローバルGAP認証を取得しているなど，食産業学群における農場の重要性を学びました。
その後は，中村氏の案内のもと農場を見学。草地，畑，牛舎など様々な設備を周りながら，敷地内で発生している害獣被害や農場生産額に対する生育費の割合などをご説明いただきました。
最後に，食肉をめぐる社会情勢や研究をご紹介いただき，質疑応答とディスカッションを実施。参加者からのブランド牛の取り扱いに関する質問に対し，中村氏からは「ブランド牛をはじめ，様々なものには求めている人がいるからできたものもある。高い肉はなぜ高いのか，安い肉はなぜ安いのかを考えてみると良いのではないか。」とのコメントが。更に，アイデアの検討を進める上で「技術だけでなく，意識の改革も必要であることを念頭に置いてみては。」とのアドバイスをいただきました。
実際の動物と畜産の現状に触れることで，デスクワークでは得られない，肉にまつわる現状と課題を実感を持って知ることのできたフィールドリサーチとなりました。



水田や畑地で収穫された作物は，大学生協等で販売されています。しかしながら，猪や鹿の被害に頭を悩ませているという現状も。

牛舎では乳牛と肉牛を飼育。搾乳や人工授精などの実習に活用しているだけでなく，仔牛の出荷も行っています。

見学の最後には，フィールドリサーチで得られた知見を元に，「肉」というテーマと多角的に向き合いながら活発な議論が行われました。

ACTIVITIES

#03

フィールドリサーチまとめ

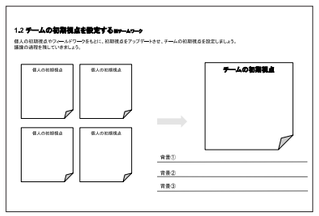
フィールドリサーチの内容のまとめと，食に関する未来洞察，ディスカッションを実施しました。初回に構成されたチームに分かれ，大山氏のアドバイスのもと，フィールドリサーチで得た知見から気づきを導出。更に，歴史的な視点と合わせて洞察を深めていきました。

実施日
2022年10月7日（金）

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

チーム単位での視点の設定とテーマに基づいた年表の作成

各自が整理したフォトノーツなどを元に，チームごとに情報を共有し，そこからチームとしての初期視点を設定。更に，初期視点を切り口として，過去から現在までの流れをふまえ，次のアクションのヒントを得るために，テーマに沿った年表の作成を行いました。



ワークシートを使って，各自の気づきや考えを丁寧にまとめながら，チームの初期視点を整理。文章化することで見えてくる新たな視点もあります。

真っ当に「肉」の未来を予想するだけでは，悲観的になる傾向があるとの指摘が。そこで，議論の軸を再設定したり，切り込み方を検討しながら年表を作成することに。

#04

仮説の組み立て・発表

肉自体のあり方だけでなく，それを取り巻く環境をテーマにしたものなど，チームごとに多様な視点で検討された年表が出揃いました。また，次回の最終ワークショップでは，「2050年の肉の未来」をテーマとしたSF小説を発表することに。調査を行うだけでなく，未来そのものをデザインすることを念頭に置き，執筆を進めていきます。

実施日
2022年10月14日（金）

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

「肉」にまつわる多様な歴史の読み解きから未来をデザイン

年表の作成を通じて，「肉」を取り巻く変化には技術が密接な関係にあるという気づきを得たチームや，「肉」を基点に自らの置かれた環境を見直すことで，自分ごととして捉えられる範囲を拡大するという新たな視点を定めたチームも。

アイデアの検討と共有を繰り返すことで，チームのアイデアをブラッシュアップさせるだけでなく，新たな視点獲得のきっかけに。

小説を書くのは初めてという参加者も多く，これまで得られた視点や情報をいかし，試行錯誤しながら作業が進められていきました。

#05

全体ワークショップ「肉の未来祭」

参加者は第4回までにまとめた食肉に関する未来洞察をSF小説の形式で共有し，田村氏，石川氏から講評を受けました。その後は現代に存在する様々な食肉（一般の肉，代替肉等）を試食しながら，食肉の未来を議論。最後には，食肉に関する課題とアプローチを大きなマップに貼り出して議論を行い，ワークショップを締めくくりました。

実施日
2022年10月22日（土）

会場
太白キャンパス
ディスカバリーコモンズ，
研究棟5Fラウンジ

チーム①作品あらすじ

2050年のとある地方のコンパクトシティで…

❶移住支援を生業とする主人公は，隣人を招き，3Dプリンター製の肉を使ったバーベキューを開催する──❷60歳の主人公が暮らすこの国では，国民と動物の幸福度を上げる様々な取り組みが行われており──❸培養肉という概念が定着し，生物の倫理や幸福度の観点から世間ではそれを選ぶのが良いとされるが──

POINT
- 物事の本質を見る事，広く社会を見る事
- ヒトも家畜も幸福になり，環境も改善する循環型社会
- 食産業のプロセス全体に対する幸福度向上

チーム②作品あらすじ

多様化する肉の未来と命の可視化

主人公は妻と娘との3人家族。10月のある土曜日，孫の誕生祝いに奮発してスーパーの肉コーナーへ向かう。2030年に起こったタンパク質クライシス以来，食肉の価格が高騰し，代替肉が一般に普及し始めた。主人公の家庭でも食卓の一部となったが，社会における従来の天然肉に対する価値軸にも様々な変化が──

POINT
- 肉の現状を変えるための，人々の意識・生活変革の必要性
- 食肉のプロセスの見える化
- 「食べる」＝「命をいただく」ことの理解

チーム③作品あらすじ

2050年とある一般家庭の食卓事情

本作の主人公は12歳の小学6年生。パパと2人きりのお楽しみな晩ご飯は，なんと言ってもブランド牛。ママは環境にも牛にも負担をかけない優良牛が好きだし，給食で出るのはもっぱら培養肉。でも，どちらも価格がお手頃だし，社会との関わりを感じられて良いとは思う。とは言えパパの肉料理は脂身が眩しくて──

POINT
- 現代の畜産業の抱える諸問題による培養肉や植物性代替肉の開発促進
- 「農福連携」という取り組み
- 価値観や幸福感の選択肢の追加

試食会に用意されたのは，一般的な肉だけなく，ブランド牛，経産牛，魚肉，ベジドック，大豆ベースの代替肉など，様々な現代の「肉」たち。

肉を食べる行為自体を捉え直して未来の姿を深く洞察し，望ましい未来に向けて最適なアクションを模索することの重要性を実感しました。

STUDIO 3　地域文化の再構築と発信

本スタジオのテーマは，各地に存在する「地域文化」の中から「行山流水戸辺鹿子躍」の情報発信方法を検討すること。舞の観賞や文化発祥の地での現地調査，踊り手等当事者へのヒアリングを通じて，フィールドに出向き体感することの重要性を実感しながら，柔軟な思考力と，多角的な視野の習得のためのトレーニングに取り組みました。

GUEST

山田 雅也 氏

第1回レクチャ，第2〜3回アドバイザー，第4回講評

1980年生まれ。群馬県出身。TVCMや映画制作における技術サポート，クリエーターマネジメント，プロデュース業を経験。東日本大震災を契機に東北に伝わる地域文化の価値と魅力を再考する場を作り発信し次代へ継承するための活動として「東京鹿踊」「縦糸横糸合同会社」を立ち上げる。鹿踊を踊る一方で，東北の風土や文化を活かしたコミュニケーションデザインを企画プロデュース。東北と東京を拠点に活動中。https://tateito-yokoito.com/

PROCESS

2022年12月26日(土) 第1回 DSCオープンレクチャ
2023年 1月15日(日) 第2回 フィールドリサーチ
2023年 1月17日(火) 第3回 フィールドリサーチまとめ
2023年 1月26日(木) 第4回 講評会

会場：第1, 4回 大和キャンパス デザイン研究棟 1F オープンスタディ
　　第2回 南三陸町各所
　　第3回 オンラインビデオ会議
参加人数：合計8名（事業構想学群 4名，学外者 4名）
協力：行山流水戸辺鹿子躍

ACTIVITIES

#01　DSCオープンレクチャ

はじめに，ワークショップのファシリテーターを務める山田氏より，自身の活動紹介を交えながら，地域文化との向き合い方や，情報発信時のポイントについてレクチャを実施。後半には，次回のフィールドリサーチに向けて，対象の事前調査と当日のリサーチ内容，アウトプットのプランニングを行いました。

実施日
2022年12月26日(土)

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

レクチャ／編集の視点から考える 地域文化の再構築と発信

山田 雅也 氏（東京鹿踊，縦糸横糸合同会社）

山田氏より，地域資源の発掘などを目的とした企画開発事例をご紹介。特に，生ものである地域文化の情報発信においては，情報の整理や再編集，再構築が重要であるとのこと。更に，相手を変えようとするのではなく，自分自身の視座，視点，視野を広げる・変える努力をしながら課題に向き合って欲しいとの助言がなされました。

ワークショップオリエンテーション

はじめに，今回の対象である「行山流水戸辺鹿子躍」について調査。各自の興味のポイントを共有した後に，情報の発信方法を検討。伝え方だけでなく，ツールやリサーチの仕方も整理しました。最後は，次回のフィールドリサーチに向けて，どのようなアウトプットのためにどのような情報を得たいかをプランニング。当日までにリサーチプランを固めていきます。

活動フロー　行山流水戸辺鹿子躍の調査 ▸ 発表 ▸ 発信方法検討 ▸ 発表 ▸ プラン検討 ▸ 発表

ACTIVITIES

#02 フィールドリサーチ

鹿子躍の踊り手である小野寺翔氏にご案内いただき，行山流水戸辺鹿子躍発祥の地，南三陸311メモリアル，南三陸さんさん商店街を訪問した後に，行山流水戸辺鹿子躍保存会の皆様による演舞を鑑賞。これまで画面の中だけで見ていた，舞の迫力や衣装の美しさを目の当たりにし，現地を訪れ体感することの重要性を改めて実感しました。

実施日
2023年1月15日（日）

会場
南三陸町各所

現地を訪れ
見て，触れて，聞く

昭和57年に発見された行山流水戸辺鹿子躍供養塔を皮切りに，南三陸エリアが東日本大震災に受けた被害の大きさを学べる南三陸311メモリアル，復興の息吹を感じられる南三陸さんさん商店街など，鹿子躍を取り巻く背景にも触れながら現地をリサーチ。鹿子躍の演舞観賞では，復活から現在までの歴史や，衣装の持つ意味だけでなく，踊り手の皆さんの想いもお話いただきました。

#03 フィールドリサーチまとめと構想

フィールドリサーチを経て得られた知見と各自の情報発信案を発表し，山田氏と担当教員からのアドバイスのもと，アイデアを深掘り。鹿子躍そのものだけでなく，それを取り巻く環境をひっくるめて発信するという案も見られるなか，最終講評に向けて議論を重ねながら，アイデアの具体化を進めました。

実施日
2023年1月17日（火）

会場
オンラインビデオ会議

リサーチで得たものを，作り手としてどう伝えるか

初回の調査時には，多くの参加者は衣装や舞など，目に見える鹿子躍の要素に興味を持っていました。しかしながら，フィールドリサーチ後には，踊り手や地域，コミュニティのあり方などに興味の対象がシフトした参加者も。単なる鑑賞者ではなく，作り手としての視点の持ち方が会得され始めました。

#04 講評会

最終回では，これまでに検討してきた情報発信案の発表と講評を行いました。様々な案が出揃い，ブラッシュアップすれば企画として充分成立するとの評価を得たものも。参加者からは，普段とは異なるデザインプロセスに戸惑いながらも，他者の考えに触れることで，自身の思考の癖を知り，見直すことができたという感想も聞かれました。

実施日
2023年1月26日（木）

会場
大和キャンパスデザイン研究棟
1F オープンスタディ

課題との向き合い方を考え続けること

参加者は再びオープンスタディに集合し，情報発信案のプレゼンテーション実施。各地の民俗芸能を紹介するWebサイトや，鹿子躍をモチーフとした絵本など，多様な提案がなされました。
最後に山田氏より「技術を知り身に付けるだけでなく，極めることが重要であり，今後も「視座・視点・視野」を念頭に置いて課題に向き合ってほしい。」との総括が述べられました。

IDEAS

● **民俗芸能地図帳**／鹿子躍に限らず，各地での民俗芸能に関する情報を掲載。普段は触れない人でも，地域情報と合わせて民俗芸能情報を知ることができる。

● **鹿子躍をモチーフとした絵本**／鹿子躍を未見の人々にも迫力を伝えられるよう，色鮮やかで躍動感のある絵とともに，動きの様子などを擬音で表現。

● **人々の心の動きに着目した動画の制作**／「ココロオドル」「シシオドル」という文字と，踊り手や鑑賞者の映像が交互に表示される構成の動画シリーズを制作。文章で説明するのではなく，人々の姿や様子でメッセージを伝えたい。

● **鹿子躍を基点とした交流イベント**／鹿子躍の発信の目的を再考し，南三陸町の関係人口やUターン，Iターン増加のためのイベントを検討。誰でも舞を体験できるコーナーのほか，かつての踊り手へ向けた「思い出し鹿子躍」という企画も。

民俗芸能地図帳（Webサイトイメージ）／「知る」「探索する」「触れる」という3種の入り口を設け，ユーザーと情報との多様な接点をデザイン。

鹿子躍モチーフとした絵本（表紙イメージ）／静止画でありながら舞の迫力を伝えられるよう，油絵のような動きのあるタッチで描かれます。

文化芸能だけでなく，あらゆる課題に対して，どのように考えるか，向き合うか，またそれを考え続けることが大切だと山田氏は言います。

スタジオでは自分だけでは思いつかなかったアイデアを聞くことができ，自分の意見を言うことも怖くなくなったと話す参加者も。

DESIGN STUDY CENTER

宮城大学デザインスタディセンター
STUDIO REPORT 2022
2023年3月31日発行

［編集・発行］
宮城大学デザインスタディセンター
［デザイン］
合同会社FLAT
［撮影］
株式会社フロット

DSC Webサイト
https://www.myu.ac.jp/dsc/